玉川教会たより

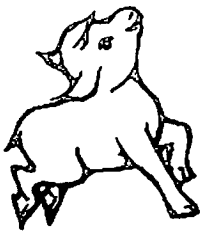
NO,464

12月21日

▼「ベスはわしにとってかけがえのない女房だ。まあ、わしがあいつにしてやれることといったら、こんな気持ちを隠しておくことくらいしかないんだろう」

「学校では服についてもいろいろいわれた。服も弁当以上にそまつだからだ。でもぼくたちシェーカー教徒は『質実の民』だ。体にもサラの上にも、余分な『フリル』は必要ない」

…「続・豚の死なない日」ロバート・ニュートン・ペック、白水社。



▼「母さんたちの望みはつつましい。あんなによく働くのに。『わたしたちの食事を祝福してください』母さんは目をとじてつぶやくように祈る。『そして、神に仕えるわたしたの食卓を祝福してください』」

続・豚が死なない日

貧実という言葉はもはや死語だ。しかし、この物語には、澄んだ貧しさが描かれ、透き通った悲しみが存在する。

▼続編は、前作での父の死後、2週間経った時から物語られる。しかし、続編が書されたのは20年後のことだそうだ。この20年が、貧しさにも、悲しみにも、透明感を与えたのだろうか。

父の死後、役牛が突然死し、重労働が少年の肩にのしかかる。老いて乳を出さなくなった雌牛を、税金や銀行の土地代ローンのために、ドッグフードにされると知りつつも売らなければならなくなる。その緊殺のようすを、独りでは死なせられないと、13歳の主人公は、最後まで見届ける。

▼干魃に襲われ、痩地の収穫は激減する。敬虔な母さえ、我が身の上を呪いたくなる程に、不幸が続く。

しかし、この物語は絶望的ではない。その基調は、不平でも憤懣でもない。不思議な慨めに満たされている。貧しい衣服も食卓も、悲しみも、辛い労働も、みな美しい。

▼ラストシーンの貧しいクリスマス。

「星は黄色く輝いている。十二月の星の中に一つだけ、生まれたばかりのような星がみえた。ぼくは思わず指さした。母さんとキャリー伯母さんも吊られて顔をあげると、敬虔な気持ちでその神秘的な星をみつめた。『ほら』ぼくはいった。『あの金も銀もみんなぼくたちの宝物なんだ』」

▼シェーカー教は、異端とは言えないが正統的キリスト教徒も言えない。しかし、ここに、失われたプロテスタント、むしろピューリタンの伝統・信仰が生き延びているようにも思う。食べ物も生活も、仕事もそして命も、皆神さまから与えられたもの、その信仰によって、彼らには不平・不満がない。

12～1月の諸集会

諸集会を覚えて、ご加祷下さい。

教会学校クリスマス会
12月23日（火・祝日）
14：00～
どなたでもご遠慮なくご出席下さい。

燭火（イブ）礼拝
12月24日（水）19：30～
礼拝後、お茶の会、影絵上演
キャロリング

越年祈祷会
12月31日（水）23：30～
マナの部屋で行います。

新年礼拝
1月4日（日）10：30～
礼拝後に、軽食を用意し、簡単な茶話会を持ちます。

初週祈祷会
1月7日（日）10：30～
普段の朝・夕の聖書研究祈祷会を、合同で守ります。

公現日
1月6日（火）

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　TEL. 042－732－9321